瀧華国転生譚

美貌の悪役文官は病弱皇子を手懐けたい

青年期
—しののめ—
東雲
花鶏が従える霊獣。
縁起が悪いとされる黒蛇で、
噛まれた者は真実しか
話せなくなる
力を持つ。
—こうせつ—
江雪
蘇芳の主で、花鶏の後見。
本来の物語では花鶏を
傀儡の帝にした大悪人。
底知れなさの
ある人物。
—あとり—
花鶏
父帝に見捨てられた
訳ありの第三皇子。
孤独で人を信頼しない
病弱な少年だったが、
蘇芳に慈しまれるうちに
彼を深く想うように。
—すおう—
蘇芳
乙女ゲーム
「瀧華国寵姫譚」の悪役。
今の中身はゲーマーな元リーマン。
処刑される未来を避けるため
皇子・花鶏を懐柔しようとしたが
少しずつ情が
移ってしまう。
—うげつ—
雨月
花鶏の異母兄で、
皇位継承の最有力候補。
品行方正で人気もある
第一皇子だが、
何か悩んでいる
様子。
—さわらび—
早蕨
蘇芳の家僕。
賢く真っ当な青年で、
急に人が変わってしまった
主を訝しんでいる。
幼少期
CHARACTERS

目次

瀧華国転生譚　美貌の悪役文官は病弱皇子を手懐けたい　7

番外編　運命の赤い縁　327

瀧華国転生譚

美貌の悪役文官は病弱皇子を手懐けたい

寝苦しさを感じてうっすら目を開けると、朝靄が立ち込める庭先からの青白い光が、窓の形を切り取り、白い壁に丸く映っていた。
夜と朝、月光と朝日が溶けて混じった水底にいるようだ。
（……今、何時だ？）
普段なら、まだ夢の中にいる時間だろう。ぼんやりした頭でそんなことを思い、サイドテーブルの上に手を伸ばした。寝る前に充電しておいたはずのスマートフォンで、時刻を確認しようとしたのだが――
（あれ、ないぞ。俺のスマホ、鞄に入れっぱなしだったか？）
いつも同じ場所に置いてから寝るのが習慣なのに、手探りしても見つからない。それどころか、サイドテーブルがあるはずの位置を探っていた手がガン、と何かに当たった。
「痛って」
思わず声に出してから、痛みのおかげでようやく意識が明瞭になってきた。
寝台に横たわったまま、ぐるりと室内を見回す。

いつもの「見慣れた部屋」だった。
花鳥を透かし彫りされた、紫檀の寝台。象嵌細工の円卓と、二脚の椅子。本や骨董品を陳列するための書架と、その横には山水を描いた屏風。どれも古いが、名工の品であることは一目見て分かる。
この部屋に住むことになった時、「新しいものを用意する」と言い張る「彼」を宥めすかして、放置されて埃を被った調度品を掃除し、壊れた部分を修繕して使い続けていた。そのせいか、住み始めて数年経った今では、見慣れなかった重厚な家具にも愛着が湧くようになった。
そう。ここでは、アラームなんて鳴るはずがないのだ。
朝の陽光に自然と意識が覚醒する習慣は、「この世界」に来てから身に付いた。
今朝だって、いつもと同じ時刻に起きるはずが、何故中途半端なタイミングで覚醒してしまったのか。
探さなくても、原因はすぐに判明した。
（またか……はあ。また勝手に侵入しやがったな、コイツ）
寝起きでもすぐ覚醒するタイプなので、さほど時をかけずに異変を察知した。何者かの両手が背後から腹に巻き付き、片足が脛の上に無遠慮にのっている。
重い。ぎゅうぎゅう絡みつく両腕に圧迫され、足も重石のようだ。これでは安眠を妨害されても仕方がない。
溜息を一つ吐いてから、背後に首を捻り、安眠を妨げた不届き者を一喝した。
「殿下、……殿下！　また間違えてますよ。ここは私の部屋で、私の寝台ですよ。何故毎回勝手に

入って、勝手に寝てるんですか！　ほらもう、起きてください、朝ですよ」
身じろぎすると、後ろからひっしとしがみ付いていた男が「んー」と呻き、首筋に顔を埋めてきた。そのまま深く息を吸い込む気配に、首筋がぞわりとする。
昔見た、友人が飼い猫を「吸う」光景を思い出した。その時の、吸われている猫の何とも言えない虚無と哀愁に満ちた表情を、今の自分も浮かべているのではないだろうか。
腹の前に回された腕をべしべしと叩く。
「殿下、起きなさい。私はもう起きますから、離してください」
ぐるんと腕の中で身体を反転させる。これ以上ないほど近くにお互いの顔があった。身長差があるので、普段はここまで顔が近くなることはない。
「殿下、いい加減になさい」
今度は形の良い額をべちんと叩いた。うう、と眉をひそめるが、これでも起きない。仕方ないので鼻を摘まんだ。
さすがに目を開けたが、まだ寝起きのぽやんとした眼差しである。ようやく焦点が合うと、嬉しそうに目が細まった。
「先生。おはよう。今朝も綺麗ですね」
そう言って、蕩けるような笑みを向けた。
馬鹿らしくなって、頭の下から枕を引っこ抜いてやった。そのまま、美しい顔めがけ容赦なく落とす。

んが、と小さく呻くのを放って、さっさと寝台を下りる。
「まったく、何度も言っているでしょう。ご自分のお部屋で寝なさい。子供の時分ならまだしも、御年お幾つにおなりですか。……殿下？」
返事がない。どころか反応がない……
振り返ると、顔の上に枕をのせたまま、腕をだらりとさせて微動だにしない青年の姿があった。結っていない癖のある長い髪が無造作に広がっている。大きく寛げた襟元から覗く健康的な胸板は上下していない。
ピク、と口元が引き攣った。むろん苛立ちのためだ。
（朝っぱらから何ふざけてるんだ、いい歳して……ああいや、駄目だ。ここで反応してやるから、いつまでたっても俺の言いつけを無視するんだ）
ならばと、こっちも無視して朝の支度をすることにした。屏風の反対側で身繕いし、腰まである長い髪を梳くと、手水で顔を濯ぐ。この作業にも、今や随分慣れたものだ。
ふと振り返れば、青年はいまだに同じ体勢のまま、ピクリとも動かない。
（息……してるよな。絶対、ふざけてるだけだって分かってるのに）
そろそろと寝台に近づいた。
（若い奴でも心筋梗塞とか、いきなり脳震盪になるとか……この子に限って絶対ないだろうけど）
「殿下？　朝からふざけるのも大概にっ」
顔の上の枕に手を伸ばした瞬間、甚だしい瞬発力で上体を起こした青年に腕を掴まれ、グイッと

引っ張られた。
倒れ込みながら頭に浮かんだのは忸怩たる思いだ。
（またやっちまった！）
力強い腕に絡めとられ、もう片方の腕も腰に回される。寝台に半分寝そべった状態で、青年――花鶏が肩口に顎をのせてきた。
「こら、殿下！」
「おはよう」
「……おはようございます。寝癖が凄いですよ」
花鶏はうるさそうに前髪を手でかき上げ、「これでいい？」と甘えるように首筋に擦り寄った。
「……毎度貴方のおふざけに付き合うのをやめなくてはと思うのに……楽しいですか？　子供みたいな真似をして」
「楽しいですよ？　先生が最近俺に冷たいので、構ってもらうのに必死なんです。健気だと思いませんか？」
「……冷たい？　私が？」
「前は一緒に寝てくれたけど、最近は寝台にも入れてくれないし、俺から触らないとこうやって『スキンシップ』もお預けにされる。昔の先生はもっと俺に優しかったのに」
口調は不満げだが、目は笑っている。こういう時の花鶏はじゃれているだけだ。
「昔の貴方はもう少し可愛げがありましたからね。というか、私は許可していませんよ。殿下が勝手に寝台に入ってきているんです。身体が大きくなったんですから、態度もしゃんとしてください。臣下の寝床に主人が入ってくるなど。……変な噂が広まったら困るのは殿下ですよ」
「変な噂って？　先生、それは何ですか。俺は初めて聞きました。どんな誤解か知っておいた方が良さそうだ」
わざとらしく目を見開く花鶏を睨めつけた。
（ああ言えばこう言う奴に育っちまって……小さい頃は素直で、俺の言いつけをハイハイ聞く子だったのに）
在りし日の思い出に、再びの溜め息を吐く。
「口さがない噂については気にすることはありません。殿下が悪いわけじゃありませんから」
当時の花鶏を思い出し、無意識に頭をよしよしと撫でていた。
「けれど、殿下もいずれ細君を娶り、ご自分の家族を持つことになるんですよ？　いつまでも私が一緒というわけには」
頭を撫でられて機嫌を良くしていた花鶏が、途端に目つきを険しくした。
「俺の家族は先生だけだって何度言えば分かるんですか。……ねえ、俺には先生だけだから、そんな悲しいこと言って俺を虐めないで」
まただ。成長した花鶏は、この手の話題に過敏に反応するようになった。しかも、悪い意味で。
（もしかして女性不信なのか……？　だとしたら余計、俺が気を利かせて良いお嬢さんとの縁を取り持ってやるべきか）

「そんなこと言って、殿下の方こそ先生を困らせないでください。それに、それとこれとは無関係でしょう。こんな風に私の寝床に入ってきたら駄目です」
「子供の頃の夢を見たんです。それで悲しい気分になって、どうしても先生の顔が見たくなって」
「だからって起きた後も子供のままでいる気ですか？　ほら、いい加減に離れなさい」
「先生が俺に冷たかった頃の夢だった」
花鶏を引き離そうと肩に置いた手が、ぴくりと震えた。それ以上力を籠めることができず硬直する。
花鶏はさっきまでのお調子者の雰囲気をかき消し、悲しげに眉尻を下げていた。こころなしか、目も潤んでいるように見える。そして自嘲するように小さく笑った。
「あんな昔の夢をまだ見るなんて、おかしいですよね。たまにあれが現実だったのか分からなくなる。……だって」
言いながら、抱きしめる腕に力を込めて頬擦りしてくる。
昔ならともかく、成長した今は大型犬に圧し掛かられているようだ。花鶏は甘えた声で「俺の先生は、こんなに綺麗で優しい人なのに」と囁いた。
抱き着きながら目線だけを上げた花鶏が、「俺のこと、この先も嫌いになったりしませんよね？」と、回した腕にさらに力を込める。ぎちぎちと獲物を締め上げるような強さに、思わず眉をひそめた。
「もちろんですよ、殿下」
縋るように額をぐいぐいと押し当ててくる花鶏の頭を、優しく撫でてやった。
「殿下を嫌うわけないでしょう。この世で一番大事に思っていますよ」

「ずっと傍にいてくれますよね？」
言葉に詰まった。本当ならここに存在するはずのない、偽物の自分が、いつまでも一緒にいることができるとは思えない。
無言をどう受け取ったのか、花鶏がじっと見つめてくる。
「俺を置いてどこにも行かないって、今、約束してください。約束してくれたら、大人しく自分の部屋に戻るよ」
「殿下にも、いつか私などより大切な人が現れますから……」
「俺の大切な人はこの先も先生だけだ。先生も俺だけを大事にしてください。俺以外の誰かに『先生』なんて呼ばせるのも絶対に駄目だ。でないと」
花鶏が押し殺したような声でそう言った時、薄暗い部屋の隅で、姿の見えない何かが蠢く気配があった。
――ずるり、と。重いものが床を擦るような音が聞こえた。
花鶏に抱き着かれたまま、「分かった分かった」と頭を撫でて、やれやれと溜息を吐く。もうこれで何度目だろうか。懐いてくるのは可愛いが、年齢を鑑みれば、もう少し大人びていてもいいくらいだ。甘やかしてはいけないと思いつつ、面と向かうとつい絆されてしまう。
「まったく貴方ときたら。いつになったら先生離れができることやら」
「離れる必要なんてあるんですか？　生涯、俺の傍にいてくれる約束でしょう」
（……そんな約束したか？　してないだろ。適当なこと言いやがって）

指摘したらまた機嫌を損ねそうだったので、黙っておいた。
（可愛くて、いい子なんだけどな。これじゃあホントに嫁さんどころか恋人もできないんじゃないか？　俺の育て方に問題があったんじゃないだろうな……）
すりすりと甘えてくる花鶏をあやしながら、少し心配になってきた。まさか本当に、これまでの自分の接し方に人格形成における悪影響があったとしたら、どうしよう。
気付いた時には過去の記憶の扉が開き、この世界で初めて花鶏に出会った時のことを思い出していた――

第一章　悪役エンド回避プラン

「……そういうわけだから、花鶏殿下の世話係を新しく雇い入れなくてはいけないね。蘇芳」
芦屋はぱちり、と瞬きした。まるで焦点が定まらないかのようにぼんやりしていたが、やっと自分の目の前の、何やらおかしな光景の中央に座ってこちらを見上げる人物を見つめた。
「ええ、はい。お世話を、その」
声を出したが、そのせいでまた混乱し、今度はむせそうになる。それでようやく目の前の人物も、彼の下僕の様子がいつもと違うのを察した様子だった。
「蘇芳、どうしたんだい。具合が悪いのかい？　顔色が悪いようだが」

気遣う声に無言で頷くと、その人物は立ち上がって親しげに芦屋の頬に手を添えてきた。
「冷や汗までかいて。このところ巫監術府で根を詰めすぎているのではないか。今日はもう下がりなさい。殿下のことは、明日の朝また話そう」
芦屋はほっとして、ゆるゆるとお辞儀をすると、踵を返した。
部屋を出ようという時、台の上の茶器に触れるカチャ、という音がして、穏やかな声が背中にかけられた。
「主治医を呼んで、念のため診てもらうのだよ」
無言のまま頷いて、今度こそ足早に部屋を出た。

「嘘だろ……なんだよこれ。ああくそ、歩きにくいな！」
ぶつぶつと悪態を吐きながら回廊を進み、いくつかの角を曲がり、庭園を突き抜ける外階段を上り降りし、簡素だが上質な誂えの一部屋にたどり着いた。
中に入るとすぐ戸を閉め、鍵がないのでとりあえず花器が飾ってある文机を引き摺ってきて塞いだ。
「どうなってんだ」
即席バリケードの前でへたり込み、呻きつつ手で顔を覆う。見るからに年代物であろう文机を引き摺ったせいで飴色の床に傷がつこうが、全く問題はない。
何故ならここは自分の部屋だからだ。正確に言うなら、江雪が子飼いの蘇芳に下賜した仮の住ま

いである。私邸も兼ねた邸宅の離れに設けてあり、何かあった時に江雪の仕事を手伝うのには都合がいい。本宅は別にあるが、もっぱらこの離れの一室で寝起きするのが常だ。

――ということを、当然のように芦屋は知っている。

数分前、芦屋はオフィスビルの一室で、ノートパソコンを前にオンライン会議の議事録を取っていた。ビルの窓から昼過ぎの日差しが射し込んできて眠気を誘い、カタカタと指を動かしているとふっと意識が遠のきかけたが、いかんせんカメラオンの状態で舟を漕ぐのはまずい。欠伸を我慢するために顔をしかめて仕事をしていた。

そして次の瞬間には、何の発端も予兆もなく、あの場所にいた。目の前に座る人物を見た最初の感想はそう――

（随分と金と気合の入ったコスプレだな）

これに尽きた。現代日本でお目にかかることはない重厚感のある服装は、ドラマなんかでよく見る隋や唐時代の漢服のイメージが一番近かった。しかし胸の前で合わせる襟の形や、腰を帯らしきもので締めているせいか、どことなく「キモノ」を連想させる。こういう衣装は時代劇でも見たことがない。

（一体いつの時代考証なんだ？）

現実逃避じみたことを考えていると、突然、視覚情報が堰を切ったように眼球から脳へ流れ込んできた。

部屋の様子。板と漆喰の壁、漆を塗ったように艶やかな板張りの床、木枠に透かし模様の入った大きな丸窓、花鳥で彩った調度品。エスニック、あるいはシノワズリとでもいうのだろうか。

和風というより中華街のそれにも似た異国情緒と、どこか昔懐かしくもある趣。しかし言葉はどう聞いても日本語だ。日本人とは似て非なる外見をした先ほどの男。それは何も着ている服ばかりではない。女性でも珍しいくらいの長髪を後ろで結って、髪飾り……いや冠だろうか、そんなものが鈍色に反射していた。

形の良い額。目は髪と同じ赤みがかった赤銅色という、外国人でもあまりない色素だ。多分カラーコンタクトとウィッグだろう。若者ファッションには詳しくないが、ぱっと見、馴染んでいて地毛かと見紛う程であった。

――と、先ほどの男が自分とそう年の変わらないことに気付いた。

（……まあ、人の趣味にとやかく言うのはよくないな）

ファンタジーから抜け出てきたようないで立ちで、堂に入ったコスプレイヤーは、何事かを自分に話しかけていた。

『花鶏殿下の世話係を新しく雇い入れなくてはいけないね。蘇芳』

声は音として耳に入ってきたが、意味は全く分からない。だが、「蘇芳」という単語を改めて思い出した瞬間、芦屋はそれまでの混乱などいっそ吹き飛ぶくらいの衝撃に襲われた。

画面越しの映像を猛スピードで見せつけられるように、それまでなかったはずの蘇芳なる人間の記憶と知識が一気に頭の中へなだれ込んできたのだ。

時間にして一瞬。しかし莫大な、一人の人間の半生の軌跡。もしも記憶に質量があったなら、煉

瓦でぶん殴られて脳震盪を起こしたようなものだ。その場で気絶していてもおかしくなかった。
今、芦屋という男の意識と記憶の真横に、〈李蘇芳〉という男の人生が存在している。それは、他人が脳に居座っているかのような薄気味悪い感覚だった。
〈蘇芳〉の記憶を自分のものとするには違和感がある。一方で、幼少からの蘇芳の記憶と感情を自然と「思い出す」こともできる。自分は今や芦屋という二十七歳のサラリーマンであると同時に、外見と記憶は、〈蘇芳〉という名の十九歳の青年文官なのだ。
しかも、問題はそれだけではなかった。
冷静になってみれば、流れてきた〈蘇芳〉の記憶と、さっきの男の名――江雪というピースを組み合わせると、芦屋の記憶にぴったり合致するものが一つだけあった。
（「瀧華国寵姫譚」に出てくる登場人物と同じ名前じゃないか！）

「瀧華国寵姫譚～白虎の章～」は、半年前に発売され、それなりの人気を博したノベルゲームだ。架空の中華風世界を舞台に、主人公の少女が瀧華国の後宮に召し上げられることから物語は始まる。少女は「秘蹟の巫女」として困難を乗り越えつつ、何人かの攻略キャラとの恋愛が発展していく。
王道ストーリーに加え、大手ゲーム会社がそれまでの作品から引き継いだノウハウをもとに、マーケティングを戦略的に手掛け、設定や人物描写も好評だった。グラフィックの美しさや長編ならではの伏線回収も効いているし、攻略キャラはそれぞれ個性的で、当然ながら趣の異なる美形ぞろい。
そしてもう一つ、昨今のストレス社会の世相を反映したものか、悪役側の断罪イベントに必要以

上の爽快感を提供しているのも人気の理由だろう。プレイヤーが「そこまでする？」と思ってしまうほどの執拗な報復展開。しかしプレイするうちに、それがだんだん癖になってくる、そんな評価や口コミで、このゲームは売り上げを伸ばした。
悪い奴が残酷にやっつけられるのは楽しい。誰が何と言おうと、それは人の心理だ。ましてやプレイヤーは主人公の少女に共感しているのだから当然だろう。
何故芦屋がそれを知っているかといえば、ほかでもない、彼もまたプレイヤーの一人だったからだ。「瀧華国寵姫譚」は原作小説が存在し、そちらは恋愛が主題というよりは、ライトレーベルから出たいわゆる王朝ファンタジーもので、主人公も秘蹟の巫女ではなく、雨月皇子である点が異なる。芦屋は原作を手にとった延長線上でゲームにも手を出した読者の一人だった。
芦屋はぐるぐる記憶を漁りながら、違ってくれ、勘違いであってくれと天に祈った。これがもし、夢でも、突然発症した精神疾患の類でもないのなら。自分が知っているこの世界の筋書きは――
（〈蘇芳〉はゲームの主要キャラじゃなかったはずだ。非攻略対象の端役で、主人公と会う機会もほぼない。奴は最後――）
ガタ、と背後で音がした。続いて戸を開けようとして手こずっている気配。
「蘇芳様、そちらにいらっしゃいますか？　江雪様よりお加減を悪くされたと伺いました。戸の前にいらっしゃるので？」
若い男の声。芦屋、もとい蘇芳はへたり込んだまま、ぎくしゃくと膝で這って扉から離れた。内向きの観音扉は文机で塞がったままだ。不審そうに中を気にしている人影が、磨硝子を通して見えた。

「待て、今開けるから」
まだ自分の声にも慣れない。立ち上がって裾を払った。肩からはらりと流れ落ちた長い髪の感触にはもっと違和感がある。
深呼吸一つ。逃げ場はない。今はとにかくやり過ごすしかない。
（これが夢でもなんでもなくゲームの世界なら、俺がここにいるのはまずいぞ）
とにかく状況を把握して、それから――
（ここから逃げる。外に逃げて、元の世界に戻る方法を探すしかない！）
そして叶うことならすぐにでも、この鬱陶しい長髪を切ってやるのだ。

「旦那様、白湯と熱冷ましをお持ちしました。洪庵先生もすぐに」
参ります、と言いかけた言葉を呑み込み、早蕨が怪訝な顔をする。
（そうだ、早蕨だ。こいつは〈蘇芳〉の下僕みたいなもので、確か仲は悪かったはず）
「お髪をご自分で結われたので？　それにこれは……床をどうされたのです」
やっと室内に入ってきた早蕨は周囲を見回し、さらに眉をひそめた。
「戸を塞いでおられたので？」
「その、少し一人になりたかったんだ。すまない」
早蕨は無言で主人をじっと見つめた。どぎまぎしながら「どうした、早蕨」と問いかけると、何故かいきなり背中を押されて奥の寝台の方へと押しやられる。

「え、ちょっと、あの」
「蘇芳様、ひとまず横になってください。すぐに先生が参りますから、それまで絶対安静になさりませ」
目を丸くしている間に有無を言わせず寝台に放り込まれ、早蕨は部屋を出ていった。

「本当に異常はないのですか？　洪庵先生。頭に瘤でもできていやしませんか。何か変なものを口にされたとか」
「そう申されましてもなあ。大げさじゃないのかね。滋養のある薬膳を届けさせるから、薬を飲んで休ませなさい。ただの疲労だろう」
「でも私のことを名前で呼んだんですよ。ここ数年、お前以外の呼び方はされたことがないのに。それに日中から冠を外すなんて。人一倍、身なりに執着するあの人らしくない」
寝台の上で豪華な刺繍の綿布団にくるまれた芦屋は、大きな溜め息を吐いた。
あの後、洪庵と名乗る医者が診察に来た。そして診察が終わり帰るという段になって、早蕨は戸の向こうで医者を引き留め、あれこれ問いただしているというわけだ。二人は声を潜めているが、「蘇芳の耳」は性能が良いようで丸聞こえだった。
どうやら早速、違和感を与えてしまったらしい。所詮は蘇芳の身体に入った偽物の身である。
長い髪が鬱陶しかったから適当にその辺にあった紐で束ねた。邪魔だから重たい冠を外した。どれも早蕨が部屋に来る前の自分の行動だ。そんなことでいちいち困惑されては、この先キリがない。

――俺は蘇芳だ。

芦屋は布団の端を鼻まで引き上げながら、何度も念じた。少なくとも元の世界に無事戻れるまで、もしくは当面の身の安全が保障されて他人の振りをしなくても良いその時まで……蘇芳としてやっていくしかなさそうだった。

「蘇芳様」

洪庵が辞した後、釈然としない顔で早蕨が部屋に戻ってきた。

「お加減はいかがでしょうか」

「悪くない、と言いたいが、まだ熱があるみたいだ。悪いが起き上がらせてくれないか」

またしても気味の悪いものを見たような顔をされたが、もう気にしないことにした。そしてこういうことに関しては、芦屋は決めてしまえば思い切りが良い質だった。

どのみち、完全な模倣は不可能だ。最低限やり過ごせればそれでいい。

(どうせ中身が違う奴だなんて、証明のしようもないからな)

「それなら寝ていらした方が」

「書簡を出したい。筆と紙を持ってきてくれないか」

「……承知しました。紋書印紙をお持ちしますか？」

紋書は官吏が使用している紙で、よく見ると表面に地紋が一つ捺してある。

正式な文書から日々の些末な報告書まで、基本的にはこれを使い、後でどの部門の書類か判別しやすいように、意匠はそれぞれ異なっている。蘇芳の所属する巫監術府では、大きく開いたカラスウリの花弁の意匠が用いられていた。

「私信だから何でもいい。書いたら赤間に届けておいてくれるか。手隙の時で構わないから」

「構いませんが、急ぎでないならやはり休まれてください。明日は予定通り、江雪様の元へ行かれますか？」

小言を言いつつ、早蕨は書きやすいように膝の上に置く小さな折り畳みの台も用意してくれた。その上で紙にするすると文字を書きつけながら、蘇芳はそういえば、と早蕨を見やる。彼は蘇芳が個人の書簡と言ったため、行儀良く文面が見えない位置まで下がっていた。

「最近、殿下の世話役について何か聞いているか？　江雪様とその話をしている時に具合が悪くなった」

早蕨は怪訝な顔をした。

「何故そんなことを聞くんです？　帆世を追い出したのは蘇芳様でしょうに。殿下はよく懐いていらっしゃったと聞いていますが。ご実家があのようなことになったとはいえ、皇族の御方に馴れ馴れしすぎると言って罰したのではなかったのですか」

蘇芳は黙って筆を置いた。書き上げた書簡を差し出す。受け取っても蘇芳からの返答がないので、早蕨は仕方なくそのまま部屋を辞した。

(帆世……。駄目だ、記憶にない。というか、ちょっと待てよ。今気付いたけど、これって)

完全だと信じていた蘇芳の記憶、実は肝心な部分が穴空きでは？　もしそうなら由々しき事態だった。

（なんでだ？　あの時確かに、俺の中に〈蘇芳〉の記憶が入ってきたのを感じたぞ？）

待て。落ち着け。整理しろ。考えを巡らせると、ある仮説が浮かんできた。

つまり大前提として、ここはゲームの世界。生きて目の前に存在しているように見える早蕨も江雪も、配置されたキャラクターに過ぎない。いわば役割を与えられた駒だ。

そしてキャラクターには当然、設定がある。物語の核心に関わるキャラクターであるほど、細かく設定され、人格や個性を与えられている。〈蘇芳〉にもシナリオ上の役割があるが、所詮は端役の悪役だ。攻略対象の皇子たちほど詳細な設定がないのは当然のこと。

つまり〈蘇芳〉から引き継いだ記憶とやらも、結局は芦屋が知っているゲーム既出のエピソードの記憶に過ぎず、制作側さえ把握していない設定部分は端から知りようもないのでは？

例えば、原作小説にしか書かれていない設定やエピソードはどうだろう？　もっと言ってしまえば、原作者しか知らない、文字化する前の頭の中で生まれた構想までが、この世界ではきちんと反映されているとしたら？

蘇芳はぞっとした。まるでそこら中に歯抜けがある巨大なジグソーパズルの上にいるみたいじゃないか。

（というか、シナリオに関連ある記憶しか〈蘇芳〉が持っていないとすると、それ以外の記憶は、俺だけがその歯抜け状態の盤上にいて、他の奴らはみんな補完されたパズルの上にいるのと同じ状態と言えるんじゃないか）

さっきの早蕨が、「自分のしたことなのに忘れたのか？」という態度だったのを見るに、蘇芳以外はこの世界の完全な住人だから記憶の穴など存在しない。もしくは、あったとしても不自然に感じることなくそのまま過ごしていく。所詮ここは仮想世界だから、主要キャラ以外の有象無象は人の形をした張りぼてみたいなものだ。

蘇芳だけが、現実の世界からやってきた異分子。ゲームを通して知り得ている情報以外は、全くの未知数だ。

蘇芳は腕組みをして、今しがたの仮説を整理した。

正直、記憶の穴の真偽はこの際、不明でも構わない。〈蘇芳〉の記憶はあくまで他人のそれが勝手に頭に割り込んできただけだ。たとえその記憶が不完全でも、惜しいとは思わない。

だが見過ごせないのは、蘇芳の今後の計画に支障が出る可能性がある点だろう。

名付けて、悪役ＥＮＤ回避プラン①

「瀧華国寵姫譚」には、二人の主人公が存在する。一人は、プレイヤーが操作する少女。後の「秘蹟の巫女」だ。もう一人は、こちらは準主役と言っていい。攻略対象の一人で現皇帝の長男、雨月だ。原作小説では少女と結ばれる相手であるため、物語も初期は彼を起点にストーリーが進行する。

二人は出会ってすぐに惹かれ合うが、少女は奴婢の出だ。この先交わることはないと思われた二人は、彼女が奴婢の身分としては初めて、秘蹟の巫女として宣託を受けたことから再会。少女は正妃候補として後宮入りし、貴族子女たちと選抜試験なるものに挑み、果ては国を襲う災厄を神力によって払いのけ――と、まあ……

陰謀渦巻く宮中で果敢に、そして純真に、恋する人と絆を深めていくのだ。

どんな物語にも、スパイスとしての悪役は欠かせない。いなくてもいいが、どうせならいた方が正義のヒーローやヒロインが際立つというものだ。

「寵姫譚」における悪役は大なり小なり複数いる。その中の一人が、大変遺憾ながら〈蘇芳〉その人であった。

〈蘇芳〉は若くして後の宰相・江雪に取り立てられた文官で、彼の遠縁にあたる。美しい容姿と才覚を持つが、それらはいわば表の顔で、裏では口にするのも憚られる悪癖に手を染めていた。

一つは贈賄。もう一つは弱き者を嬲って喜ぶ嗜虐癖である。後者はより質が悪い。人買いから身寄りのない少年少女を買って虐待したとか、犬に喰わせて、死体は自宅の井戸に投げ捨てているだとか……

ちなみにこれらはゲーム上では「噂」として扱われ、真偽のほどは定かではない。そのためか、〈蘇芳〉の「記憶」もその辺りは曖昧だった。

（曖昧で良かった。井戸の中を確かめるのは……絶対やめておこう）

ともかく、清廉な表の顔と知る人ぞ知る裏の顔が相まって、〈蘇芳〉を知る人々の人物評価はちぐはぐだ。まあゲーム上では間違いなく、下衆野郎に分類されるが。

そんな卑怯で矮小な小者、〈蘇芳〉が唯一服従するのが、彼を取り立てて官職にまで押し上げた江雪である。

この江雪こそ、「瀧華国寵姫譚」における最大の悪役だ。彼は自分が擁立した第三皇子を玉座に座らせるため策を弄し、雨月皇子暗殺を企てた。

そして中盤、ついに雨月は逃亡を余儀なくされ、江雪は念願叶って覇権を握る。そして仕上げとばかりに、息子のように可愛がり育てた傀儡の皇子を、部下に命じて毒殺させる。この役目を実行したのが、何を隠そう〈蘇芳〉だ。

シナリオ終盤、反乱軍を率いて帰還した雨月によって江雪一族は捕らえられて処刑される。もちろん〈蘇芳〉も。

これから迎える結末を知っている身としては、処刑など勘弁願いたい。

こちらの世界で死んだら現実に戻れるのでは？　という期待もなくはないが、もしそうでなかった場合は取り返しがつかないではないか。そんなリスクは断固、拒否だ。

（だったら俺のとるべき道は一つだ）

悪役ＥＮＤ回避プラン①　――逃げる。

〈蘇芳〉の名前と身分を捨て、金目のものを拝借して、とっととゲームの盤上から退場する。

（でも待てよ。今すぐ逃げるのは、逆に危険じゃないか？）

何しろこの世界で知っていることといえば、ゲーム上の展開と世界観程度。それも原作から入ったので、主人公・雨月ルートの流れを大まかに知っているだけなのだ。

持ち出した金品で生活しようにも、それが尽きた後の生計は？　すぐに元の世界に帰れる糸口が見つかるとも限らない。

少なくともここにいる限り、当面の生活は保障される。仕事があり、身の回りを世話してくれる早蕨をはじめとする使用人もいて、住居もある。食うに困ることはない。

シナリオ通りであれば、江雪たちが皇子を毒殺し、処刑されるまで少なく見積もっても八、九年はある。そんなに長く留まりたくないのはやまやまだが、裏を返せば、それまでは命が繋がっていると見ていいだろう。

悪役ＥＮＤ回避プラン①　一部修正――逃げるための生活基盤の確立、および「保険」の確保。これだ。

（見通しが立ってきたな。そうと決まれば、明日からの俺の仕事も決まった）

この世界で自分を守るための「保険」に会いに行かなくてはならない。

第二章　花鶏

「花鶏」という名は、彼の生みの母が付けた。彼女の名は朝月夜。没落した地方貴族の娘で、奉公先の多々良姫に仕えていた。彼女が十六歳の時、多々良姫が側室として後宮入りし、彼女もそれに付き従った。

表向き、花鶏は多々良姫と皇帝・紫雲の間に生まれた子だ。しかし、実際は皇帝が朝月夜に産ませた双子を、多々良姫が偽って自分の子としたのではないか、とまことしやかに囁かれていた。

多々良姫の出産後、朝月夜が後宮から消息を絶ったことも、ほどなく知る人ぞ知るところとなった。

この件はシナリオには深く関与しないので、蘇芳も設定資料集で事実を知ったに過ぎない。それによると、多々良姫は朝月夜が産んだ双子の赤ん坊を無理やり彼女から取り上げて、自分の立場を優位にしようとしたらしい。

側室であろうが、次期皇帝となる可能性がある男児を産めば、正妃と並ぶ権力を持つ。この時、すでに皇位継承が目された皇子は二人いたが、先のことは誰にも断言できない。周りに怪しまれながらも十月十日、身重のふりをし続けた多々良姫は大したものだ。

ともあれ、母親から意に染まぬ形で奪われた双子の赤ん坊は四歳まで、多々良姫とお付きの者たちによって掌中の珠のごとく大切にされ、それは今後も続くと思われた。

双子の運命が変わったのは、五歳を迎えた年だった。

多々良姫の父親が、不祥事を起こして失墜した。波紋は一族全体に及び、後ろ盾をなくした多々良姫がいくら皇子を擁立しようとて、もはや立場を保てる状況ではなくなったのだ。

後ろ盾をなくした姫が後宮で生きていくことは生半可なことではない。しかも苦心して手元で養育した赤ん坊は、自分を差し置いて側仕えの女が皇帝の寵を得てできた子供である。

子供たちは、多々良姫にとって無用の長物となった。花鶏の人生は、この瞬間歯車が狂ったと言っていいだろう。実母の記憶はなく、多々良姫を母と慕っていた花鶏たち双子を気に掛ける者は誰もいなくなった。

正妃が産んだ皇子が一人、もう二人の側室にも男児が一人ずついる状況では、没落の憂き目を見た側室の皇子皇女など、どれほどの価値があるのか。

後宮において、誰を支持するのか、これに勝る重要な選択はない。見誤れば、自分や一族が路頭

に迷うこともあり得るからだ。
だからこそ、花鶏たち姉弟は放逐された。最低限の世話だけを受け、仮にも皇帝の血を引いているのは間違いのない尊い身でありながら、荒れた後宮の片隅で飢えと寒さを味わった。
この時、すでに多々良姫は心を病んでおり、花鶏たちを直接苛むことも珍しくなかった。諌める者はおろか、前途のない主人を見限って古参の使用人まで主のもとを去る始末だった。後宮の一画で、身分の低い下人にまで無視されること数年。
さらなる決定的な不幸は、花鶏たちが八歳の時。唯一の片割れである双子の姉、花雲が病死したことによって、幼い皇子の心身は完全に崩壊した。
お互いだけが心の支え。この世でただ一人の愛する家族。優しい姉。
（これがきっかけで、花鶏は心の底ですべての人間を憎んでいるんだよな。江雪以外は）
ゲームの設定とはいえ、酷な人生だ。
そんな彼を救って、自分の手元での養育を買って出たのが、他ならぬ江雪だった。姉以外で唯一、幼い少年を認めて、励まし、慈しんで、皇帝にまで押し上げた男。いっそ実の父親よりも慕っていたはずだ。結局、用済みになって毒殺されるのだが。
（手を下すのは俺なんだよな……。俺というか、〈蘇芳〉だけど）

早朝。蘇芳は知識を整理しながら、早蕨に手伝わせて着替えをしつつ、やるせなく溜息を吐いた。
「お気に召しませんか？」

帯を結んでくれていた早蕨に訊ねられて、え、と首を傾げた。ややして、〈蘇芳〉がかなりの着道楽で、用意された衣装に毎回ごちゃごちゃ文句をつける習慣があったのを思い出した。蘇芳の溜息を、用意した衣装が気に入らないせいだと思ったらしい。
芦屋自身は着るものにはそれほど拘りがなく、品質が良いもの数着を着回していた。その方が楽だからだ。〈蘇芳〉との価値観の違いはこんなところにも転がっている。
「いや、これで構わない。殿下に目通りするから、髪も適当に結ってもらえるか」
「江雪様とのお約束の時間はどうなさるのですか？」
「まだ早いから、先に殿下にご挨拶してから向かおう。先触れをしておいてくれ」
早蕨はおや、という顔をした。彼の考えている内容が手に取るように分かる。
珍しいこともあるものだ。これまで一度も、先触れなんてしたこともない癖に――とまあ、そんなところだろう。
（まずはこれを何とかしなくちゃいけないよな。仮にも皇族に対して、蔑ろにして当然って風潮が浸透してるのはまずいだろ）
長く艶のある黒髪を耳の後ろから掬うようにして後頭部でまとめ、翠玉をはめ込んだ冠でまとめると、貴族の青年文官「蘇芳」の完成だ。
さて、気合を入れるとしよう。何せこちらは一応「予習」もばっちり。だが油断は禁物だ。どんな仕事もミスをした後のリカバリーは早急な着手が望ましい。

花鶏が江雪の邸宅に保護されて半年足らず。
可哀想な少年の洗脳を解いて、まっとうで健(すこ)やかな大人にすべく布石を敷いてやるには、たっぷり時間が残されているはずだった。

「殿下。蘇芳様がご面会の許可に使者を遣わしてまいりました。いかがされますか」
家僕の言葉に、少年は黴(かび)臭い湿った寝台の上でたちまち表情を強張らせた。思わず全身に力が入り、背中には嫌な汗も流れてくる。
江雪が言うには、自分は病気で、回復するまで日光は浴びない方が良いらしい。そのため部屋は窓がない半地下にあり、いつも薄暗かった。
もし明るければ、少年の顔にまぎれもない嫌悪が浮かんでいるのが分かっただろう。
その、嫌悪の根源とも言うべき男が、ここに向かっているという。
しかも、普段はしない先触れをして。まるで貴人に対して礼儀を尽くすように。
ここで否と言う権利は自分にはない。奴の前で生意気な態度を取り、少しでも機嫌を損ねたり怒らせたりすれば、どんな仕打ちがあるか、もう知っている。
真っ暗闇の地下室に一昼夜放り込まれたことはまだ我慢ができた。が、大きな酒樽(さかだる)に鼠(ねずみ)と一緒に閉じ込められた時は――。前の晩に、鼠を使って罪人を拷問(ごうもん)する話を蘇芳本人から聞かされたばかりだった。泣いてここから出してくれと懇願(こんがん)したが、当然のごとく無視された。
それ以来、蘇芳は花鶏にとって抗(あらが)えない恐怖の象徴となった。みっともなく泣く姿を見られたことが、憎しみの火に油を注いだ。
後宮にいた頃は母親でさえ花鶏たちを蔑(ないがし)ろにしたが、どちらかと言えば無視して放っておかれることが多かった。何故、それまで会ったこともない蘇芳から執拗(しつよう)に加虐されるのか花鶏には理解できず、不可解な執着が気味悪かった。
――半刻後。
薄暗がりを優雅に歩んできた蘇芳は、部屋に入るやいなや、寝台の上の花鶏と目が合うよりも早く床に叩頭した。
花鶏は驚きのあまり身体が硬直した。そんな真似、江雪以外にされたことがなかった。ましてや蘇芳なら、死んでもしないはずだった。
すぐに視線を合わせずに済んだおかげで、よくよく蘇芳を観察できた。これまで、二人の間には一方的な加虐の空気が張り詰めていて、そんな余裕はなかったのだ。
蘇芳の雰囲気はいつもと違っているように思えた。何が、と言われてもすぐには言葉にできないが。
床の上に広がった淡い浅黄色の裾と、藍色の帯、綺麗に結われた長い艶(つや)のある黒髪。
いつもの華美な衣装ではない。むしろ地味と言っていい色合いだ。帯玉も重ね襟も、その他の宝飾も精緻(せいち)な刺繍もない。案内してきた家僕も変化を感じ取ってか、ちらちらと蘇芳を盗み見ている。
身なりが簡素になったといえばそれまでだが、普段の蘇芳を知る者からすると、纏(まと)う雰囲気が一変して見えた。
「殿下」

呼ばれて、花鶏はハッとした。花鶏を呼んだのは蘇芳ではなく、部屋の隅に控えた家僕だ。
「……顔を上げてよい」
花鶏は警戒しながら声を振り絞った。
蘇芳がゆっくりと顔を上げて花鶏を見た。その瞬間、何故か驚いたような表情が青年の美しい顔に浮かんだ。
見開いた目と、小さく息を呑む気配。
「――？」
訝しむ少年の前で、なんと彼の仇敵は突然ホロ、と涙を零した。

――就寝前。
蘇芳は寝間着に着替えて寝台に横になっていた。
場所は江雪邸に間借りした部屋ではなく、城下にある古い民家だ。入れ替わったその日のうちに、蘇芳は江雪邸から、古いが周囲の目を気にしなくて済むこの「自宅」へ移り住んだ。長らく不在にしていた割には、家の中は埃も積もっておらず綺麗な状態だった。早蕨が何度か掃除に通ってくれていたおかげである。
江雪邸にあったような豪華な造りの寝台ではないが、蘇芳にはこれで十分だった。眠りに落ちる前に、花鶏との対面について思い返す。
江雪は何故、決して快適とは言えない穴倉のような半地下に花鶏を住まわせ、見張りを立てて出歩けなくさせているのか。まともな人間が見たら、誰だっておかしいと思うはずだ。放逐され、後ろ盾がないとはいえ、少年は皇位継承権三位の身である。
答えは明白だ。江雪は花鶏を支配下に置き、いずれ来るべき時に向けて、自身の傀儡として操る準備をしている。このまま行けば、花鶏は江雪の思惑通り兄皇子と対立し、挙句の果てに自身も江雪に毒を盛られてしまう。
〈蘇芳〉が江雪の目を盗んで皇子を虐待していたという事実は、江雪には筒抜けだったろう。むしろ好都合だったはずだ。虐げる者の存在により、江雪の慈愛は花鶏にとってまさに天からのクモの糸にも等しかったに違いない。
江雪にとって使い捨ての駒に過ぎなかったという点では、〈蘇芳〉も花鶏と同じだった。
目下、江雪が花鶏を引き取り、軟禁し始めて半年ほど経っている。その間、蘇芳は大なり小なり陰湿な虐待で少年を傷つけてきたはずだ。
（見た感じだと、怪我の類はなかったな。さすがに周りの目もあるから当然か。でも服の下や見えない場所に痣があるのは、虐待事件でよくあるケースだ）
少年がこのまま江雪によって洗脳されて闇落ちしたとしよう。ゆくゆくは残虐な王となって人民を虐げ、江雪に処刑される。最後には蘇芳も同じ末路を辿ることになるだろう。
話自体は簡単なのだ。要は、少年が悪に染まらなければいい。
十歳の子供を純粋なまま育てて、大人になったら放流してやればいい。そこから先は兄の雨月皇子を支える皇族臣下になるもよし、領地に引っ込んで美人の嫁さんや、場合によっては側室を迎え

て悠々自適に暮らすもよし。好きにやってくれて構わない。
その時には、蘇芳も元の世界に戻る何らかの方法を見つけられていれば万々歳だが、贅沢は言わない。少なくとも処刑ルートを回避できれば、いかようにも道は開けるはずだ。
しかし障害もある。
江雪の目がある中で、突然それまでの態度を翻して花鶏を保護するのは容易ではないだろう。絶対に怪しまれる。裏切りがバレたら、江雪は子飼いの蘇芳にも何をするか分かったものではない。
（本当ならすぐにでもこの家に花鶏を連れてきたい……けど、一介の官吏が皇子の身柄を引き受けるなんて到底無理だ）
そうなると、せめて江雪に悟られぬように陰ながら花鶏を支えてやって、何とか持ち堪えさせるしかないのか。
今日は花鶏に面会したものの、盛大に失敗してしまった。せっかく簡素な服に着替えて、印象操作を狙うつもりだったのに。
気休めに過ぎないが、見た目の印象というのは結構強いのだ。その違和感に気を取られているうちに、どさくさに紛れて人払いしてから花鶏に謝罪し、じわじわ懐柔していくつもりだった。
けれど、いざ小さな花鶏を目の前にした瞬間、蘇芳は思考停止に陥ってしまったのだ。
子供が酷い扱いを受けて荒んだ目をしていることに、現代人の心が予想外にショックを受けてしまったのかもしれない。そうでなければ、いきなり花鶏の姿を見ただけで涙が流れた件に説明がつかなかった。

いくら目の前で動いて喋っていても、花鶏もまた「ゲームのキャラクター」の一人に過ぎないというのに。
（虐待を受けてきた子供って、あんなに生気がないものなのか……）
結局、用意していた口上は吹っ飛んで、いきなり大の男が涙を零して慌てて立ち去るという奇行に走ってしまった。最悪だ。
花鶏からすれば挙動不審極まりない。初手から失敗した。
しかし挫けるわけにはいかない。なんてったって、こちらも命が懸かっているのだ。
一朝一夕にはいかないことは百も承知だが、開き直って着手するしかない。

花鶏との二度目の対面は、思いのほか早く叶った。というのも、蘇芳の方でぐずぐずしていたら、向こうの家僕から催促があったのだ。
用向きはこうだった。
『薬はご用意できていますでしょうか。間が空くと殿下のお身体によくありません。二日は空けずにお持ちいただく約束であったと存じます』
（くすり？　薬ってなんだ？）
嫌な予感がした。そしてすぐにハッと思い当たった。
（薬ってあれのことか！）
ゲームには登場しない、原作小説でのみ触れられていた内容だったので失念していた。

（俺としたことが、原作の方を忘れるなんて迂闊だった！）

「薬」の原材料は通称、花柳草と呼ばれている。名前から連想される通り、かつて娼館が遊女たちに用いたとされる洗脳薬だった。

表向き、虚弱体質の花鶏に処方する滋養薬と言われているが、その実態は花柳草の根と、滋養強壮に効くとされる生薬を混ぜ合わせたもので、江雪はこれを頻繁に花鶏に与えるよう、蘇芳に命じていた。

日頃から少量ずつ摂取させることで、慢性的な思考力の低下、無気力、不眠などの症状を引き起こす。

この間、外部からの刺激に過敏に反応するようになるため、接し方によっては強い依存心を植え付けることもできた。

江雪は自分で調合したこの薬――毒を、必ず蘇芳手ずから花鶏に飲ますよう厳命した。

もちろん、後々毒の存在が露見したりした際、罪を蘇芳に被せて自分はしらを切るためだ。江雪を盲信していた蘇芳はそんなこととは露ほども思わず、花鶏に飲ませていた。

（この薬のせいで、花鶏は〈後嗣の儀〉に出たのに、霊獣を呼び出すことができなかったんだよな）

この世界では、皇族は生まれつき神力を備えている。

それは身体の中を巡る「気力」のようなもので、基本的には生まれ持った資質に左右され、さらに心身の力が横溢していればいるほど強く発露する。この神力がどれほどのものか臣民に示すことが、王として選ばれるための布石になると言ってよかった。

〈後嗣の儀〉は、予定では今から四年後、花鶏が満十四歳を迎える年に、国の重鎮たちが観覧する中で執り行われる盛大な式典だ。

花鶏は長い軟禁生活で体力も気力も弱っていた。外見も実年齢より小さく見えた。それでも、〈後嗣の儀〉の舞台に上がる権利を父帝から与えられて、内心では喜んでいたに違いない。この辺はゲームにも原作にも描かれないから、蘇芳の想像でしかないが。

他の皇子たちが霊獣の召還を成功させる中、最後に壇上に上がった花鶏の呼びかけに応える霊獣はおらず、小さな彼は観衆の前で一人、頭を垂れて恥辱に耐えるしかなかった。

ゲームではそのことを知っても、本筋と関係ないただの補足事項にしか思っていなかった。何なら薬のことだって忘れていた。でも、今は実在の花鶏がいるのだ。この小さな子供が、近い将来そんなみじめで辛い思いをするとわかっているのに、何も思うなという方が無理な話だ。

「殿下、本日は薬をお持ちしました」

蘇芳は小瓶に入った液体を茶器に注いだ。黒っぽい液体を杯の半分ほど満たすと、ツンと鼻を刺す匂いがした。

花鶏は前回と同様に寝台の上で半身だけ起こして、暗い表情で杯を見つめた。傍らの椅子に腰かけて差し出す蘇芳の顔は見ようとしない。

やがて諦めたように受け取ると、鼻の頭にしわを寄せて、健気にも飲み下そうとする。

「お待ちください、殿下」

蘇芳が小さな手を押しとどめた。急に触れられたことに対する緊張で花鶏がびくりと固まった。

幼い瞳が訝しそうに蘇芳を見上げる。
「何をしている。お毒見役はどうした」
蘇芳の居丈高な声は、後方に控えていた家僕の男に向けてのものだった。
「へ、あ、毒見でございますか？」
おろおろと蘇芳を見ている。
「当然だ。殿下が口にされる食べもの、飲みものにはすべて毒見が必要だ。何を驚いている」
「え、でもそんなこと、これまでは……」
ごもっともである。むしろ嬉々として毒を盛っていそうな相手が突然毒見を用意しろとは、意味が分からなくて当然だ。
「それについては私も気が利かなかった」
「え、はあ」
「私や江雪殿の目の届く場所で殿下に毒を盛るような不埒な輩はいないだろう」
「も、もちろんでございますとも」
「だが、それ以外の者はどうだ？」
え、と家僕が言葉に詰まる。何を言われているのか理解できないという顔だ。
「たとえば、ここに出入りしていた若い娘だ……帆世といったか」
花鶏がピクリと反応したが、気付かない振りをした。
「帆世、ですか？　あの娘が何か」

「下働きの下女の身分をわきまえず、随分と殿下に馴れ馴れしくしていた。殿下が年若く身分を鼻にかけないことを理由に侮っていたのだろう。まだ世間を知らぬ娘とはいえ、少々度が過ぎたので私が江雪様に上申してお役御免にしたのだが」
花鶏がぎゅっと布団の端を握り込んだ。
（優しくしてくれた唯一の人間を悪し様に言われるのは嫌だよな。ごめんな）
今ここにいない帆世を貶めてでも、この薬――いや、毒は飲ませられない。
「その娘が毒見と何の関係が？　まさか、帆世が毒を盛っていたとでも？」
「そんなことありえない！　でたらめ言うな」
我慢できないとばかりに、花鶏が声を荒らげた。家僕は驚いたように少年を見たが、すぐに煩わしそうに顔をしかめた。
蘇芳は家僕のあからさまな態度に嫌な感情がせり上がってくるのを堪え、先を続けた。
「殿下、落ち着いてください。私はそんなことは思っておりません」
花鶏は不安そうな、怒りと焦りが滲む目で蘇芳を見つめている。そこには追い詰められた鼠が猫を前にして怯えているような痛ましさがあった。
蘇芳は少年を見つめ返して、ゆっくり言葉を紡いだ。
「殿下。私の宮中での仕事は、この国で起こる巫術に関する様々な事件を取り締まり、悪用した者を処罰することなのです」
花鶏はそれまでの怯えとは別の不安を顔にのせた。いきなり何の話が始まったのか、ついていけ

なくて混乱している様子だ。
「……巫術」
「そうです。殿下のような皇族の方がお持ちの神力には及びませんが、私たち瀧華国の民の中には、大気の中に漂うとてもたくさんの塵を操って、まじないができる者もいるのです。ご存知ですか？」
花鶏は躊躇いがちに頷いた。
「聡明でいらっしゃいますね、殿下」
蘇芳が微笑むと、少年が驚きに目を見開く。
「神力ほど偉大な力ではないので、占いができたり、ちょっとした怪我や病気を治したり、簡単な先見をしたり。そんな程度のものですが、中には何人も集まって、操る塵の量を増やして悪いことをしようとする奴らがいるのです」
蘇芳は言葉を切って、茶器に入った液体に目を落とす。家僕と花鶏、二人の視線もつられたようにそちらへ向かった。
「少し前、城下で蟲除けの札と偽って、実際には家の者たちが病にかかるまじない札を売っている悪い奴らが捕まりました」
「……むし」
独り言のように花鶏が呟く。すぐにハッとして俯いてしまった。まるで蘇芳からの攻撃を恐れるかのように。
「〈蟲〉というのは、昆虫のことではありません。殿下」

花鶏はまたしても驚いて蘇芳を見上げた。
敵であるはずの男が、今日はやけに優しい。果ては教師のように花鶏の疑問を拾って教えまでしてくる……何故なのか。そんな戸惑いが蘇芳にも伝わってきた。
「〈蟲〉も、元は巫術の一種なのです。ただし巫術を悪用したり、人を殺めたりすること……もっと分かりやすく言えば、巫監術府が認可していない巫術は、すべて〈蟲術〉と呼ばれて処罰の対象になります」
こほん、と咳払いする。
「とにかく、そういう悪い奴らが今、城下で民を苦しめています。その中の下っ端何人かが、捕史に捕まりました」
それまで黙っていた家僕が、苛立ったように口を挟んだ。
「蘇芳様、話が見えません。市井の捕りものと今回の毒見とが、何の関係があるのです？」
蘇芳はじろり、と肩越しに男を睨んだ。
「私は今殿下と話しているのだ。私の話を遮るは、殿下に対する無礼でもある。わかっているのか」
背後が静かになったので、蘇芳は驚いた様子の花鶏ともう一度目を合わせた。
「〈蟲〉は巫術を悪用した人為的なものがほとんどですが、稀に自然発生する場合もあります。それらは大抵、水害や疫害の形を取り、酷ければ〈水蟲〉や〈疫蟲〉と呼ばれ、我々巫監術府の職員が対処します」
〈蘇芳〉の知識が脳内に流れ込んできて、こうして必要な時に引っ張り出せるのは便利だが、まる

で目の前の花鶏たちを騙しているような気分だ。居心地の悪さを無視して、説明を続けた。
「そうした〈蟲〉を防いで安全に暮らすために、行政は各家に〈蟲札〉を発行して年の初めと半年後に配ります。まあ実際は、使わずに済んで紙が古びて効力がなくなることが多いですね。滅多に〈蟲〉の被害などないので」
ちらっと花鶏を窺うと、突然わけのわからない話をされたにもかかわらず、戸惑いつつも耳を傾けてくれていた。根が素直な子なのかもしれない。もしも蘇芳が教師だったら、クラスにこんな子が一人でもいてくれたら授業がしやすそうだ。
「ところが今年の半ば、城下で何件か続いて〈蟲〉の被害がありました。被害を受けたのはどれも羽振りの良い商家や、貴族。ちょうど二回目の配布前だったので、追加の注文が間に合わずに効力の弱まった蟲札でしのいでいたのですが」
蘇芳は一度言葉を切って、もったいつけるように一呼吸置いた。
「そこへ新しく強い蟲札をやると言って、さっき話した悪い奴らが法外な値段で札を売りさばいていたのです」
買い手は裕福な商人や貴族だから、凶事が起こるよりは、家人が病気になるよりはと言い値で買った。
「殿下はこれをどう思われますか？」
そんな風に質問されると考えていなかったのだろう。花鶏はおどおどと目を泳がせた。
「……いけないことだと思います。でも、勝手にまじないを作ったり、売ったりすることは法で禁じられているわけじゃないから……？」
蘇芳は頷いた。
「そうですね。確かに、我が国の法はそこまで厳しく取り締まってはいません。では、何故捕まったのかというと、その札が全く効力のない偽物だったからなのです」
「……本物を作れないから、偽物を売ってお金を騙し取った？」
「いいえ、札は本物でした」
花鶏が何か言おうとしたのを遮って、蘇芳ははっきり口にした。背後にもよく聞こえるように。
「あれは蟲札ではなく、徳の高い人物を呪うための呪殺の札です」
花鶏の目が大きく見開かれる。
瀧華国含め、この世界の大陸には四つの国がある。
春夏秋冬をイメージしたと思われる各国には異なる民族が暮らしているが、呼び方は違えども、国民は巫術――大気中の神気を帯びた塵を操るまじないの力を持っている。能力には個人差があるため、ほとんどは生きていく上で支障がない代わりに、恩恵もない。ごく稀に力が強い者が巫術師として巫監術府の傘下に入り、国のために働くくらいだ。
ちなみに皇族が神力を持つのは、大陸の中でも瀧華国だけだ。蘇芳に言わせれば、これはいわゆるご都合主義である。
「今回、捕らわれた者たちの中に草見という名の男がいました。調べたところ、帆世はその男の遠縁に当たります」

ここにきて、やっと話がつながった。少なくとも花鶏と家僕はそう思ったはずだ。
間違ってはいないが、蘇芳にとっては帆世も草見も、正直どうでもいい。
そもそも、二人の血縁関係など、全部蘇芳のでっち上げだ。裏を取られたら困るが、幸いにして帆世は行方を眩ましているし、目の前の二人がわざわざ追及するとは思えない。蟲札の件にしたって、全部が嘘とは言わないが、巫術を悪用したこの手の犯罪は今に始まったことではないし、毒見の口実に仕えそうな案件は何かないかと探るうちに引き当てただけだった。
要は九割方、蘇芳の口から出たでまかせである。
「帆世が花鶏殿下のお命を狙っていたと？　いやしかし、そんなことが……」
家僕が訝しむのも当然だ。花鶏は今の時点ではまだ〈後嗣の儀〉に参加を許されるかも怪しい。母親の身分は低くなかったが、今は没落して後ろ盾もない。
虚弱で神力も弱く、江雪の庇護で何とか生きながらえているようなもの。わざわざ呪殺を企てて間者を忍び込ませて、誰が得をする？
「失礼ですが……本当に帆世が殿下を？　誰の差し金で、それに何の目的で」
「それは知らん」
「は？」
蘇芳は呆れる家僕に胸を張ってみせた。はったりをかます時ほど、堂々としている必要がある。さもお前が間違っているんだぞと決めつけるように、蘇芳は家僕を見つめ返した。
「帆世が本当に殿下に危害を加えようとしたのか、それは分からん。だが問題なのは、当の本人が

行方を眩まし、かつ私が調べるまで、誰もこのことに気付かなかったということだ」
「え」と花鶏が声を上げた。彼は今まで、帆世を遠ざけたのが〈蘇芳〉だと思っていたのだから驚いて当然である。実際、記憶がないから断言できないが、〈蘇芳〉がそうさせたのだろうと思う。ここで言う蘇芳とは無論、芦屋が入れ替わる前の〈蘇芳〉だ。
「これまで殿下の身辺に置く者は江雪殿の采配で人選されておりましたので、私も特に気に留めておりませんでした。ですが今回のことがあって、もしも大事な殿下の身に何か起きれば取り返しがつきません。今後、殿下のお世話をする者は来歴や人物を調査し、本心から殿下に仕える者のみをお傍に置くべきかと存じます」
束の間、白けた空気が室内に漂った。
――その場合、真っ先に追い出されるのはお前ではないのか？
そんな声が聞こえてきそうだったが、気にしてはいられない。
さりげなく江雪の株を下げておこうという目論見もあったが、さすがにそれは欲張りだろう。まだ十歳の子供にこちらの意図が通じるとは思えなかった。
「殿下の身辺を今一度、安全に整える必要があると思うのですが、いかがでしょうか」
「僕は……僕のことは全部、江雪様が」
「殿下」
蘇芳は優しく、けれどもきっぱりと言葉を被せた。ここで言いくるめて、少年の言質を取っておく必要がある。

「江雪殿は殿下の後ろ見ですが、臣下の一人に過ぎないことをお忘れなきよう」
「臣下……」
「そうです。この私も殿下より下の身分です。そのうち、おいそれと殿下と言葉を交わしたり会ったりすることもできなくなります」
花鶏は、この日一番驚いた顔を見せた。そんなことは思ってもみなかったという表情で蘇芳を凝視している。
外側からストレスを与えられ続けている人間は、得てして今より先のことを想像できないことが多いと、何かで読んだ記憶があった。
辛い時期に誰も助けてくれない状態で長く過ごしていると、その状況からの脱却や改善がイメージできなくなる、というのだ。
できないから、自分の心の方を麻痺させる。そうすることで、少しでも苦痛をしのげるように誤魔化す。
今の花鶏の心理状態はまさにそれだろう。それに加えて、少量ずつ花柳草の毒を摂取することで、神経衰弱と鬱が促進されつつある。
「お側仕えの者たちのことは、いったん私から江雪殿に上申いたしましょう。取り急ぎこの薬は」
蘇芳は茶器を自分の方に引き寄せた。
「私が毒見役を勤めましょう」

立ち読みサンプルはここまで

（……気持ち悪い）
蘇芳は苦悶の表情を浮かべ、床に置いた盥の上に覆い被さった。喉の奥に指を突っ込んでは、胃の中のものを吐き出す。水を飲む。また指を突っ込んで吐く。
そうしてやっと胃の中が空っぽの状態になると、ぐったりと寝椅子の上に突っ伏した。
花柳草は常習性が低い。だから摂取自体をやめてしまえば、その効果は徐々に薄れていくし、一度口にしたくらいでは大した影響はない。
とはいえ、体内に「薬物」が残留しているのは気分の良いものではない。結局、無理にでも体外に出すことを選んだ。
水差しの水で口をゆすぎ、げっそりした顔で髪を結っていた紐を解く。はらりと解放された長髪が背中に落ちた。
（あの子はどれくらいの期間、薬を飲んでいるんだっけ？）
ざっと指を折って計算してみる。
（えっと、俺がこの世界に来たときは十歳で、江雪に引き取られて半年だから……）
常飲を始めて、およそ三ヶ月といったところだろうか。それが短いのか長いのか、蘇芳には判然としなかった。
ゲームの中では特に言及されていないが、普通に考えれば継続して薬を盛られていただろうから、十八歳くらいまでは薬漬けだったということになる。
それを思えば、この時期から摂取量を減らせただけでも多少はマシと言えるだろう。